一、木造大日如来坐像

江戸時代

天照寺　大字伊香字高野里

像高　四四・八㎝

寄木造　玉眼嵌入　漆箔

宝冠を戴き、両手は胸前で、左拳の人差指を右の拳で握る智拳印を結び、右足を外にして結跏趺坐する。金剛界の大日如来である。大日如来は、密教における最高の存在である。他の如来とちがい、宝冠を戴き、髻を結い、条帛、裳をつけた菩薩の姿であらわされる。

構造は、頭部は耳前を通る線で前後に二材を矧ぎ、三道の下あたりで体軀に挿し込んでいるようである。体幹部は、前後に二材を矧いでいるようで、脚部は横に一材を矧ぐ。両腕は各別材で、それぞれ肩で矧いでいる。左肩よりかかる条帛や裳には、花文や網目文などの文様が描かれている。

天照寺はすでにすたれてしまい、現在はその跡地に堂宇が残されているにすぎない。この像はその中に安置されている。条帛や裳に文様を描くなど、丁寧につくられている。体の調和は程よく保たれているが、反面、形式化も著しく進み、造形的な力強さに欠ける。表情にも無気力さがうかがえる。

木造大日如来坐像

二、木造地蔵菩薩坐像

江戸時代

菊池家　大字真名畑字荒屋

像高　三四・〇㎝

一木造　彫眼　素地仕上げ

円頂とし、衲衣は左肩を覆い右肩に少しかかる。現在、両手は失われているが、もとは宝珠と錫杖を持っていたのであろう。右足を外にして結跏趺坐する。